

## ディルの抗炎症作用について

○ 兜めぐみ、森光康次郎\*、久保田紀久枝\*、田口裕基\*\*、木下茂\*\*、新井亮\*\*  
(お茶大・食物栄養、\*お茶大院・ライフ、\*\*エスビー食品・商品本部)

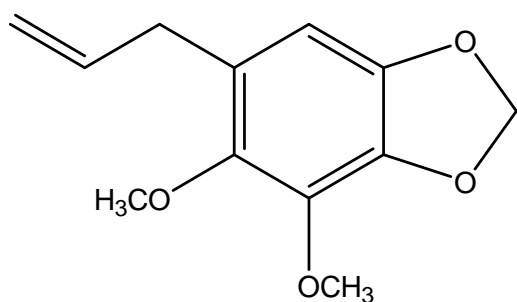
### 【目的】

ハーブには古代からの伝承民間薬的知識と食品としての長い利用歴がある。本研究では、近年増加傾向にある花粉症や食物アレルギーに代表される I 型アレルギーについて、抑制効果を有するハーブを探索するため、24 種類のハーブのスクリーニングを行った。その結果、数種類のハーブにアレルギー抑制効果が認められた。中でも特に活性の高かったディルに着目し、活性物質の探索を行った。

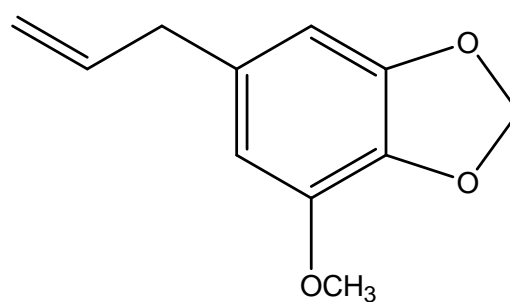
### 【方法および結果】

ラット由来好塩基球性白血病(RBL-2H3)細胞を用いて、 $\beta$ -hexosaminidase 遊離率の抑制作用を指標にスクリーニングを行った。市販されている食用ハーブ 24 種類の抽出物について調べた結果、ディル(*Anethum graveolens*)の EtOAc 抽出物に強い抑制活性を認めた。定法に従い、Si オープンカラムクロマトグラフィーで分画し、活性物質の探索を行った。Hexane/EtOAc=75/25 画分に強い抑制活性を確認し、HPLC 等でさらに分画を進めた結果、活性を示す 1 つのピークとリテンションタイムが近接した活性を有さないもう 1 つのピークを分取した。

NMR、GC-MS 等の各種機器分析を行った結果、両ピークとも単一物質で、活性物質の方を dillapiole と同定し、活性を示さなかった方の物質を myristicin と同定した。両物質はメトキシ基の数が異なる同族体で、現在、作用メカニズム等について検討中である。



dillapiole



myristicin